

# Tb3

31  
MARCH  
2007

## Distribution survey report of the Tonami city vol.3

砺波市遺跡詳細分布調査報告3

—— 林 · 高 波 ——

2007年3月

富山県 砧波市教育委員会

## 序

砺波市は、富山県西部の砺波平野のほぼ中央部、大部分が庄川により形成された扇状地上に位置しています。将来の都市像を「庄川と散居に広がる健康フラー都市」とし、まちづくりの基本理念を「花香り、水清く、風さわやかなまち 砧波」と定め、文化遺産である散村の保護・活用を図るとともに花・水・風をキーワードに自然との調和をもとめ、住民が安心して暮らせる住みよい都市をめざしています。

砺波市では、これまでに旧砺波市域全体を対象とした遺跡詳細分布調査は実施されておらず、平野部の大半が遺跡の希薄な地帯という印象を与えます。これまで偶発的な発見や地域的に特定種別の遺跡の表面調査はなされてきましたが、少ない情報をもとに地域の歴史的環境を語ることはできません。

また、砺波市は近年人口増加とともに開発行為が頻発しており、埋蔵文化財保護の必要性が日々強くなっています。現状のままでは埋蔵文化財行政を運営する上で弊害となりかねません。

旧庄川町では、すでに平成14年度から2カ年をかけて町内遺跡詳細分布調査が実施され、報告書が刊行されています。

そこで、国庫補助事業として7カ年計画で旧砺波市全域を対象とした遺跡詳細分布調査を実施する運びとなりました。

本分布調査の成果をまとめた本書が砺波市の地域史研究ならびに埋蔵文化財保護体制確立の一助となることを願ってやみません。

おわりに、調査の実施および報告書刊行にあたり、林・高波地区各自治振興会および砺波市土地改良区、富山県埋蔵文化財センター、富山大学考古学研究室をはじめ関係各位に多大なるご援助・ご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成19年3月

砺波市教育委員会  
教育長 堀田良男

## 例　言

1. 本書は、砺波市教育委員会が国庫補助を受けて 7 カ年計画で実施している市内遺跡詳細分布調査事業の3年目（2006年度）の分布調査報告である。
2. 調査は、富山大学考古学研究室の協力を得て、砺波市教育委員会が主体となり実施した。
3. 今年度調査は、砺波市林・高波地区を対象とした。調査期間は次のとおりである。

現地調査 平成 18 年（2006）4 月 12 日～平成 18 年 4 月 24 日

整理作業 平成 18 年（2006）9 月 1 日～平成 19 年 3 月 30 日

4. 調査事務局は、砺波市教育委員会 生涯学習課に置き、学芸員野原大輔が調査事務を担当し、教育次長小幡和日出が総括した。

調査事務局 砧波市教育委員会 教育次長 小幡 和日出

生涯学習課 課長 清澤 康夫

同 主幹 鍋田 忠夫（文化芸術係長兼務）

調査担当者 同 学芸員 野原 大輔

5. 現地調査にあたって、林・高波地区的各自治振興会に多大なご協力・ご理解を得た。また、基盤整備前の図面（従前図）の使用にあたって砺波市土地改良区のご協力・ご指導を得た。記して謝意を申し上げる。
6. 現地調査員は、主に富山大学考古学研究室のご協力を得た。調査参加者は、下記のとおりである。（五十音順・敬称略）

福沢佳典（人文学部人文科学研究科文化構造研究専攻）

赤座裕子、東 良朗、伊藤剛士、岡島怜子、北村志織、久慈美咲、小林高太、坂上菜美子、坂田裕之  
佐藤浩志、高橋彰則、竹中庸介、柄堀哲彦、福西廣衣、松木綾子、村上 直、山崎 翔、用田聖実  
吉田有里、（以上、人文学部国際文化学科）、久保浩一郎（富山市教育委員会）

7. 資料の整理、本書の編集・執筆は、調査担当者が行なった。また、遺物整理・図面作成には、西本智子・  
千田友子（生涯学習課）が参加した。
8. 採集遺物および記録資料は、砺波市教育委員会が保管している。
9. 現地調査および本書の作成に際して宮田進一氏（財団法人富山県文化振興財団）からご指導・ご協力を  
得た。記して謝意を表する。

## 目 次

序 文  
例 言  
目 次

<b>第 1 章 調査の沿革</b>	<b>1</b>
1 地理的環境と遺跡の分布	1
2 調査に至る経緯	4
3 分布調査の年度計画	4
4 分布調査の方法	5
<b>第 2 章 調査の成果</b>	<b>11</b>
1 平成18年度調査区の概要	11
2 採集遺物	13
3 遺跡各説	17
林神社遺跡	
南高木遺跡	
東中遺跡	
御館山館跡	
江波遺跡	
<b>第 3 章 まとめ</b>	<b>19</b>
【参考文献】	

## 表 目 次

- Tab.1 遺跡数の推移
- Tab.2 分布調査の年次計画
- Tab.3 採集遺物一覧（1）
- Tab.4 採集遺物一覧（2）
- Tab.5 調査遺跡一覧

## 図 版 目 次

- Fig.1 衛星平野の地形分類図
- Fig.2 埋蔵文化財包蔵地と地形分類図
- Fig.3 塊状耳飾
- Fig.4 踏査経路模式図
- Fig.5 衛星市分布調査範囲図
- Fig.6 調査区の字界・字名図
- Fig.7 調査区周辺の旧版地図
- Fig.8 採集遺物の時期別点数
- Fig.9 遺物実測図
- Fig.10 埋蔵文化財包蔵地と遺物採取地点

## 写 真 図 版 目 次

- PL.1 空中写真（1）
- PL.2 空中写真（2）
- PL.3 調査写真（1）
- PL.4 調査写真（2）
- PL.5 遺物写真（1）
- PL.6 遺物写真（2）
- PL.7 遺物写真（3）
- PL.8 遺物写真（4）
- PL.9 遺物写真（5）
- PL.10 遺物写真（6）

# 第1章 調査の沿革

## 1 地理的環境と遺跡の分布

**庄川扇状地** 研波市は大部分が東部を北流する庄川により形成された扇状地であり、東に旧扇状地右扇の芹谷野段丘、そして射水丘陵から連なる東別所新山山地を控える。庄川扇状地は県内の三大扇状地に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇り、面積は 146 km<sup>2</sup> に及ぶ。庄川扇状地には、地理学上著名な散村 (Dispersed Settlement) が広がっており、長闊な田園空間を形成している。

庄川はかつて幾度となく河川変遷を繰り返し、近世に至り現河道に落ち着いた経緯がある。天正 13 年 (1585) の大地震によって、庄川町雄神橋付近の弁財天社辺りで千保川・中田川に分流された。現在の庄川が主流になるのは、近世初頭の承応年間 (1652 ~ 1655) 頃の柳瀬普請、続く寛文 10 年 (1670) にはじまる上流の松川除築堤工事を経てのことである。

氾濫原であった平野部は、旧河道が幾条も通り、地形の小起伏が多い。そのため遺跡の希薄な地帯として知られ、遺跡全体の 30% に過ぎない。縄文遺跡の分布は、扇頂部に中期中葉の拠点集落・松原遺跡があるが、段丘裾の東保石坂遺跡、徳万遺跡、扇央部の久泉遺跡などが散在する状況である。

弥生・古墳時代は社会基盤が稻作に移行し、生活圏が湧水帯に移動したため、集落は未発見である。わずかに平野東部の低位段丘上にある安川野武士 A 遺跡で弥生土器が採集されている。

**東大寺領莊園** 奈良時代になると 8 世紀中頃に東大寺領莊園が成立し、平野東部を中心に扇央部まで遺跡の分布域が拡大する。莊園本拠に近い久泉遺跡、秋元窟田島遺跡、徳万頼成遺跡、扇央部には小杉遺跡、千代遺跡、高道向島遺跡、宮村遺跡などが展開し、いずれの遺跡も地理学上でいう“マッド” (mud) 上に存在する。マッドは微高地・自然堤防上に発達した黒色有機質土の堆積域であり、河川氾濫の影響の少ない比較的安定した地形といえる。

**般若野莊** 中世になると東大寺領莊園の範囲を踏襲して徳大寺家領般若野莊が成立 (12 世紀中頃か) し、扇央部には油田条 (村) が文献にみえる。般若野莊では領家方の支配領域と目される位置に東保遺跡 (東保高池遺跡)、東保般若堂遺跡があり、周辺に秋元窟田島遺跡、久泉遺跡などがある。

**芹谷野段丘** 庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成 (河岸) 段丘が存在している。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から宮森までは低位段丘が存在しており、隆起扇状



Fig.1 研波平野の地形分類図 (神島利夫 1982)

地堆積物が形成されている。高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右扇の一部が残存し段丘となったものである。南は安川付近から北は大門町串田付近まで約10kmに広がり、福岡の巖照寺周辺では海拔80mを測る。芹谷野段丘上は、近世に庄川から芹谷野用水が引かれ、集落が展開した。

**巖照寺遺跡** 段丘縁辺部から丘陵裾にかけて縄文期の遺跡が多く、巖照寺遺跡、高沢島Ⅰ遺跡、高沢島Ⅱ遺跡、宮森新北島Ⅰ遺跡、上和田遺跡などが存在する。巖照寺遺跡は柾櫛野築壙場整備事業に先立ち昭和50・51年に富山県によって調査が実施されている。竪穴住居跡11棟、埋葬1箇所、穴などが検出され、中期前葉の典型的な弧状集落であることが判明した。出土土器群は、「巖照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として中期前葉の地域的な編年を確立した。

弥生時代は増山城跡で土器片が発見されており、古墳時代は高沢島Ⅲ遺跡で遺物包含層中から土師器を数点検出している。

**栴檀野窯群** 奈良時代になると東大寺領莊園に近接することから、須恵器の一大生産地となる。段丘・丘陵一帯にある須恵器窯を総じて栴檀野窯跡群と呼び、南北約2.0kmの範囲に窯が点在し、南の福山支群・北の増山支群に分けられる。増山支群の宮森窯と福山支群の安川天皇窯が最も古く8世紀第2四半期から中葉に位置付けられ、8世紀第3四半期から第4四半期にかけて増山支群の増山龜田窯、増山団子地窯、増山妙覺寺坂窯が操業を始め、同時期には福山支群で福山窯、福山小堤窯、福山大堤窯が操業している。9世紀前半に入ると、小丸山1号窯・2号窯が操業され、9世紀後半から10世紀にかけて正權寺後島窯、増山外貝喰山窯、増山猿山窯、東笹鎌野窯が操業をし、以後栴檀野窯跡群では須恵器生産が衰退する。

**庄東山地** 芹谷野段丘の東、和田川の両岸には中位段丘が形成されており、和田川流域段丘帯をなしている。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流路延長23.5km、庄川の支流である。昭和43年、和田川総合開発事業により和田川ダムが竣工、和田川は堰止められて増山湖ができた。

和田川の右岸は、一般に庄東山地（音川山地）と呼称される範囲に含むことができ、富山県を東西に分断する射水丘陵帶の一枝群を成している。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青片谷シルト質泥岩層の範囲に含まれる。南に位置する山地は標高200m余りを最高点として100m余りの小起伏山地で構成されている。この山地の西北に位置する天狗山（標高192m）の北斜面、県民公園頼成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成っている。

**増山城跡** 和田川右岸の丘陵上には、越中三大山城のひとつに数えられる増山城跡がある。南北朝時代の二宮円阿忠状に「和田城」という城名がみえ、亀山城に比定する見方がある。室町時代から放生津城を本拠とする神保氏の支城となり、天正4年（1576）に上杉謙信に攻略され落城し、天正9年（1581）に織田方に焼き払われた。天正11年（1583）以降、越中統一を果した佐々成政の西の拠点となり、のちに前田方の手に渡り、城の守将となった中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したとされる。また、左岸には城下にあたる増山遺跡（増山城下町遺跡）が広がっている。

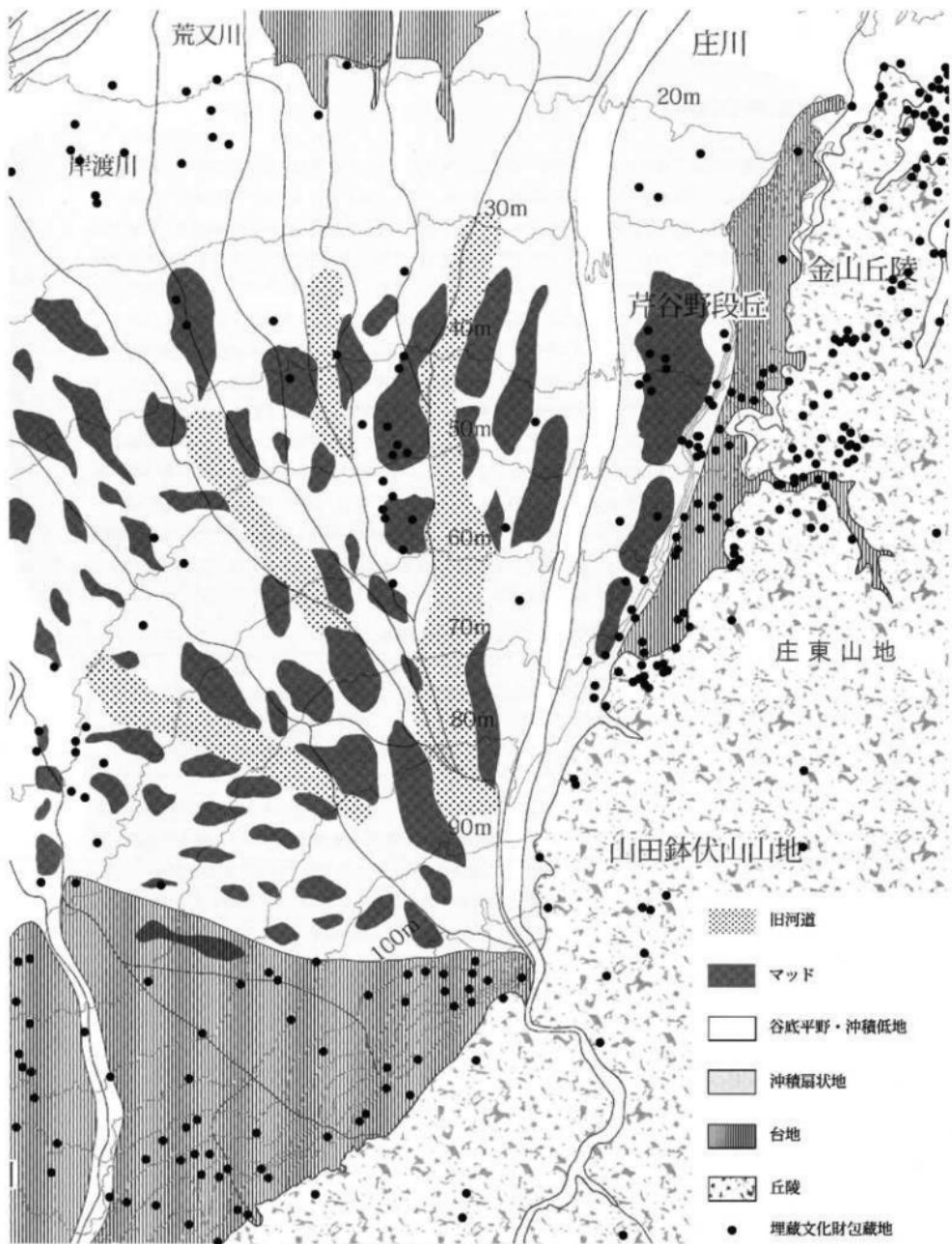


Fig.2 埋蔵文化財分布地と地形分類図 (Scale=1 / 75,000)

## 2 調査に至る経緯

沿革 遺跡地図は、埋蔵文化財の保護・周知化を目的として、これまで作成されてきた。砺波市内の遺跡は、1974年発行の『全国遺跡地図 富山県』ではわずか34遺跡しか確認されていないが、1993年に富山県埋蔵文化財センター発行の『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』では112遺跡に急増している。昭和40年代からの高度経済成長に伴う開発増加、そして全国的な埋蔵文化財保護の気運高揚に起因する。その後『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』を基に加除修正を行っており、現在まで159遺跡を確認している。インターネットを核とする情報化社会への移行に伴い、富山県では平成16年度に『富山県GISサイト』(<http://wwwgis.pref.toyamajp>)を開設し、最新の埋蔵文化財包蔵地図を広く県民へ周知すべく環境を整えた。

これまで旧砺波市では、旧市内全域を対象とした遺跡詳細分布調査が行われておらず、土木工事による偶発的な発見や市民からの届出、国道敷設等の大規模事業に伴う分布調査等により埋蔵文化財包蔵地の把握に努めてきた。このようにして設定された範囲は決して精度の高いものとは言えず、開発照会がある度に事業用地を踏査してきた。開発行為等の事前協議を進める上で精度の高い遺跡地図は必要不可欠であり、埋蔵文化財の保護・活用の観点からも遺跡地図の充実は急務である。また遺跡の分布状況は、考古学研究の基礎資料である。以上の事由から、遺跡詳細分布調査を実施する運びとなった。

Tab.1 遺跡数の推移

遺跡数			発行機関	発行年	図名
	砺波市	旧砺波市			
30	24	6	文化財保護委員会	1965	『全国遺跡地図(富山県)』
35	29	6	富山県教育委員会	1972	『富山県遺跡地図』
34	29	5	文化庁文化財保護部	1974	『全国遺跡地図 富山県』
112	98	14	富山県埋蔵文化財センター	1993	『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』
159	129	30	※平成18年4月1日現在		

旧庄川町の 項目名：旧庄川町では国庫補助を受け、合併前の平成14～16年度の3カ年で町内遺跡詳細分布調査を実施している<sup>1</sup>（現地調査2年、報告書1年）。町内を4地域に分割し、開発が予想される平野部に重点を置き調査が行われ、13遺跡の新規発見と2遺跡の台帳内容変更がなされた。採集遺物は463点を数え、約半数が庄川左岸の段丘上に分布することを把握している。

著名な金屋ポンポン野遺跡付近で縄文時代前期後葉・蠍ヶ森II式期の玦状耳飾（蛇紋岩製）を1点採集している。

1 庄川町教育委員会 2004 『富山県庄川町埋蔵文化財分布調査報告』

## 3 分布調査の計画

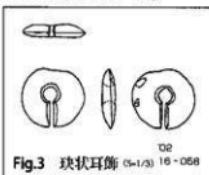


Fig.3 玳瑁耳飾 (3×1/3) 10 - 058

旧庄川町域を除く市内全域（96.33km<sup>2</sup>）を対象として、現地踏査を7カ年計画で実施する予定である（右表参照）。旧砺波市には、計17地区あり、踏査可能面積を考慮し各年度2～3地区ごとに調査を実施することにした。調査地区的設定は、開発行為が多く、埋蔵文化財包蔵地が希薄な地区を先行し、旧砺波市域の南西から北西部、中央部を縦断し庄川を越えて東部、段丘上・山間部という計画を策定した。

Tab.2 分布調査の年次計画

調査年度	年次	調査地区	面積 (km <sup>2</sup> )
平成 16 年度 (2004)	1 年次	鷹栖、東野尻、五鹿原	14.43
平成 17 年度 (2005)	2 年次	出町、若林	9.26
平成 18 年度 (2006)	3 年次	林、高波	10.88
平成 19 年度 (2007)	4 年次	庄下、油田、南般若	11.08
平成 20 年度 (2008)	5 年次	柳瀬、太田、中野	13.22
平成 21 年度 (2009)	6 年次	般若、東般若	13.53
平成 22 年度 (2010)	7 年次	梅塚野、梅塚山	23.91
			96.33

## 4 分布調査の方法

**踏査の方法** 考古学的調査として、地表面の踏査を行い遺物採集に努め、遺構・遺物の広がりや分布状況を把握する手がかりとした。砺波市の平野部は大部分が庄川扇状地によって形成され、大小河川の氾濫が現在の地形状況を生んでおり、古代以前の遺跡立地に大きく反映するという特性がある。遺跡分布と地形状況は表裏一体の関係にあるといつても過言ではない。しかし、旧砺波市では昭和 30 年代後半から県内に先駆けて大規模な圃場整備が行われており、本年度調査区もすでに整備完工されている。かつての景観は失われ、本来の地形的微起伏を確認することはできない。同時に多くの遺跡も保存されることなく破壊された可能性が高い。

そこで、近年の地形改変とこれまでの踏査経験から、遺物の表面採集自体が困難と予想されるため、「なるべく多くの日で多くの遺物を採集すること」と調査の迅速化を目的として、富山大学考古学研究室の院生・学生の協力を得て、下の模式図のように踏査経路をとることにした。扇状地上の圃場整備後の水田は、大型機械導入のため 1 区画 30 a (短辺 30 ~ 40 m × 長辺 100m) の規格を持ち、水廻り効率から短辺が磁北 (流路方向) もしくは南東→北西に設定されている。1 班 5 名の体制で 1 区画の踏査にあたり、横並びに短辺方向に沿って歩くことを基本とした。水田畔には積年の耕作の結果、遺物が集在する可能性が高いことから、各調査員はできる限り畦畔を踏査経路に組み入れることに努めた。

**遺物の扱い** 採集遺物は番号を振り、洗浄・注記・接合・実測作業を行った。注記表現は、「砺波市分布調査 3 年次 (Tonamishi-Bunputyosa 3)」から、「TB - 3」とした。現地踏査では、携帯が簡便なゼンリン住宅地図 2000 (株式会社ゼンリン北陸) にその場でプロットし、踏査後に砺波市都市計画図 (1/2500) に写した。遺物は、班ごとに番号を振り、全体の踏査完了後、すべての遺物に通し番号を付した。大半の遺物が細片であるため、実測可能な個体を選別して図化している。

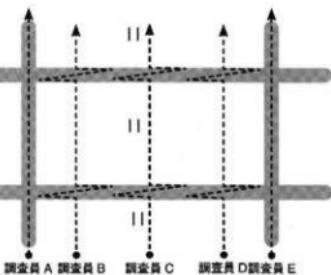


Fig.4 踏査経路模式図

**包 藏 地 の 認 定** 埋蔵文化財包蔵地の認定には、考古学的調査成果に限らず歴史地理学的・自然地理学的資料等の諸要素を考慮する必要がある。

平成 10 年 6 月に報告された「埋蔵文化財の把握から開発事業の発掘調査に至るまでの取り扱いについて」の中で法律上の保護対象となる「周知の埋蔵文化財包蔵地」は試掘・確認調査その他の発掘調査等の成果に基づき高い精度で把握・決定されることが必要であるとされており、その方法として、遺物の散布状況や地形の観察、地形・地質の形成過程を踏まえ、各時代の生活・生業に適した立地の想定、地形図・空中写真・地籍図・絵図等の資料等の総合的な活用が挙げられている。

実際に岐阜県大垣市教育委員会では、平成元年から平成 8 年度までに実施された分布調査において、踏査を中心とする考古学的調査だけでなく、「時代ごとの地形復元図を作成する自然地理学的調査、絵図や地籍図（字絵図）から地表面下の痕跡を推定する歴史地理学的調査、そして低地での発掘ではまず最初に出会う掘潰れ等の輪中景観を復元する人文地理学的調査」といった地理学的手法を援用し、遺跡推定の検討材料としている<sup>1</sup>。市域の大半が扇状地であり、「冲積地での踏査の困難さ」を指摘される点など、当市と非常に素地は似ている。大垣市教育委員会の分布調査手法は理想形とも言うべき取り組み方であるが、諸般の事情から当市で同じ手法を採用することは難しい。少しでも理想に近づけるため、当市では以下の手法を探り、埋没遺跡の範囲決定の手がかりとした。

- 1) 考古学的調査（踏査）
- 2) 歴史地理学的調査（旧字界・字名図作成）
- 3) 自然地理学的調査（従前図判読、地形分類調査）

考古学的調査の方法は、先述のとおりである。旧字名・字界図は、主に砺波郷土資料館蔵の字絵図や『砺波市史 資料編 5 集落』<sup>2</sup>から字名・字界を抽出し、旧地形図（昭和 30 年代砺波市作図）・現況地形図（平成 5 年砺波市作図）に情報を入力、必要に応じ識者から聞き取り調査を行った。

また、自然地理学的調査では、土地改良区に保管されている圃場整備前の従前図を収集し、失われた地形状況の復元を試みた。現況での地形確認が難しいため、旧地形を把握するには従前図を活用することが有効である。圃場整備前の空中写真から旧地形図・等高線図を作成することは技術的に可能であるが、費用的問題から断念した。従前図は、公図を基に作られているものや現地測量が行われているものなど精度にばらつきはあるが、基本的に縮尺が 1/500 もしくは 1/1000 であるため、空中写真よりはるかに現況図との整合が容易である。ただし、圃場整備が行われた全地区に従前図が作成・保管されていない難点もある。

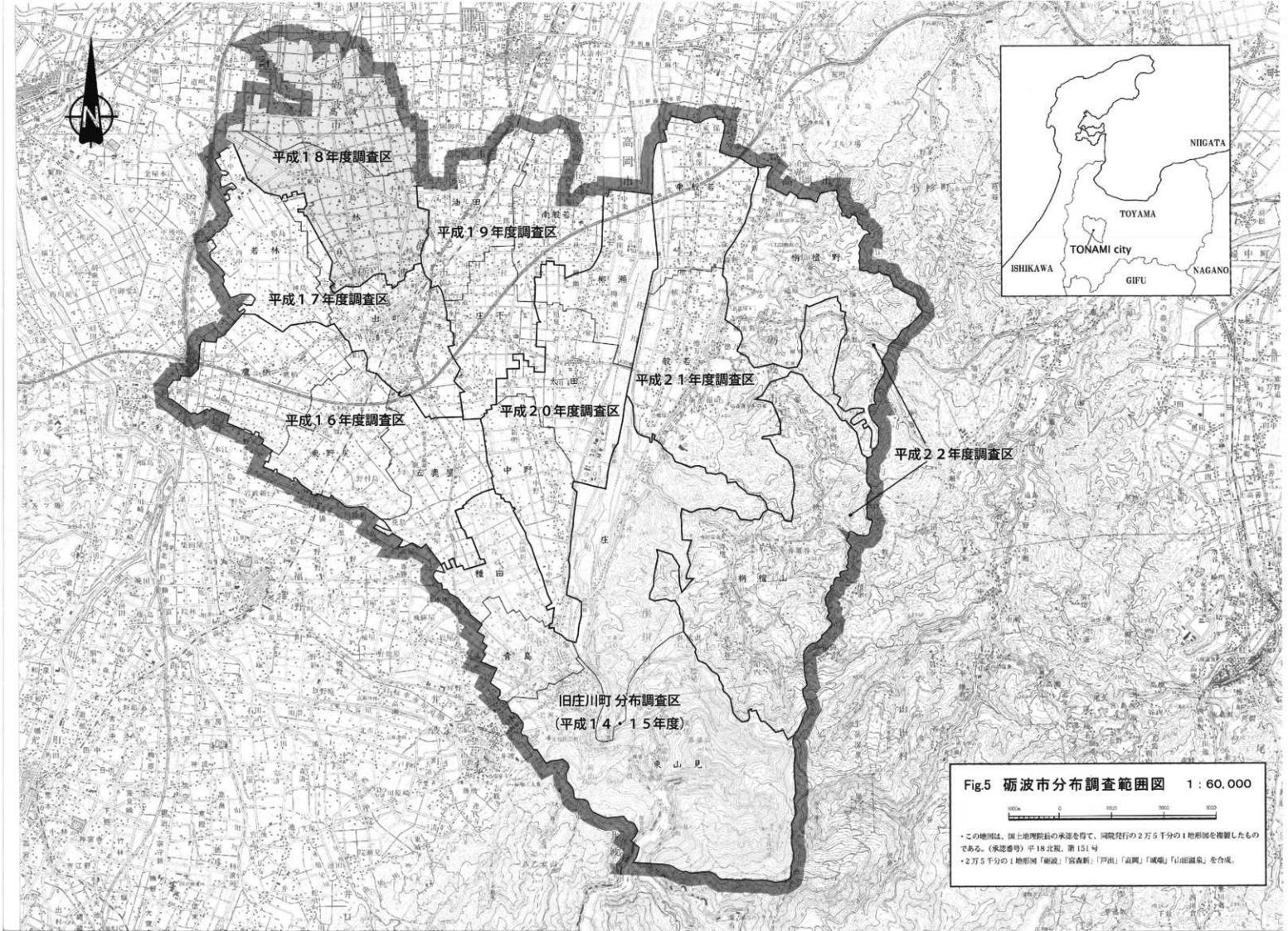
地形分類調査は、『土地分類基本調査 城端』（富山県 1981）をはじめとする地形分類図・表層地質図に掲っている。また、マッドと呼ばれる黒土層について、外山秀一氏の論文「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」<sup>3</sup>を参考としている。

- 1) 岐阜県大垣市教育委員会文化部 1997 「大垣市遺跡詳細分布調査報告書 - 解説編 -」
- 2) 砧波市史編纂委員会 1996 「砺波市史 資料編 5 集落」
- 3) 外山秀一 1997 「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」『砺波散村地域研究所研究紀要第 13 号』砺波市立砺波散村地域研究所



Fig.6 調査区の字界・字名図

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同間隔(約2万分の1)の測量地図を複製したものである。(武藏番号) 平18北緯 第151号



## 第2章 調査の成果

### 1 平成18年度調査区の概要

- 林** 日祐、紺屋島、杉木、小杉、小島、東中、水宮、新屋敷、藤沢（田尻）から成る地区である。圃場整備後の大字名整理により、統合して大字林となる。砺波市の北西部に位置し、扇状地扇内部から扇端部の散村集落である。地区内には東から東新又川、西新又川、山王川、大窪川、岸渡川、源太良川などが北流する。扇端部に近いことから、東中では湧水点もある。
- 平安時代の「和名類聚抄」には砺波郡十二郷のひとつに拜師郷（訓：波也之）がみえ、この林村周辺とする説がある。「延喜式神名帳」には砺波郡七座の内に林神社の名がみえ、現在の林神社をあてる説がある。古代遺跡として、小杉神社周辺からは須恵器・土師器が採集されている小杉遺跡が知られる。昭和44年圃場整備の工事で多くの土器が発見された。内面黒色研磨仕上げをした土師器碗には、底部外面に「田」もしくは「由」の墨書がある。土器類は、8世紀後半から9世紀後半に帰属する。
- 紺屋島の由来は、貞享元年（1684）の「由緒承伝申村々書上申報」によると「先年庄川通り申す時分、高野聖流れ懸り回り申し、それよりこの所を紺屋島村と申す由承伝申候」とある。
- 東中集落の東北隅にある牛嶋岡は義仲伝説があり、圃場整備で削平されるまでは高さ1m、広さ10m程の丘であったといふ。東中の岸渡川左岸には15世紀末頃の珠洲や土師質土器が出土したと伝わる。水宮はIH中村川の川跡にできた鷹栖出村の右岸下流にあたる。水宮社の御神体は天正13年（1585）の庄川大洪水の折、上流の雄神神社の御神体が流れてきたもので、村名の由来となっている。
- 高波** 北高木、東宮森、西宮森、江波、荒屋、荒屋新、坪北、坪北新、高儀岡、南高木から成る地区である。砺波市の北西部に位置し、高岡市との境界にある。扇状地扇端部に近く、散村景観が残る。市街から福岡往来を北上すると旧福岡町に隣接する地区である。新又川、山王川、西大井川、嶋中川（岸渡川）、源太良川などが北流し、江波の嶋中川には船着場があった。江波付近は扇端部にあたるのでいくつも湧水点があり、濁田地帯である。
- 近世以前の資料は少ないが、貞享元年（1684）の書状に「先年は宮森と申す森御座候て村名に罷りなり申候。その後西宮守村と申す在所より新村相立て罷り出申すに付いて、その節より東宮守村と申す由承伝申候」とある。元村を東宮森、新村を西宮森という。江波は、戸出往来と福岡往来が交差する街村で、氏神江波神社と眞行寺が中心にある。
- 東宮森・西宮森・東中の村境にあった丘を「御館山」と呼び、中世の城館跡として知られる。「オタツヤマ」「ウタツヤマ」とも呼ばれ、木舟城（旧福岡町）から卯辰の方角にあたることに由来すると伝わる。圃場整備により景観は改変されたが、明治31年（1898）西宮森の村社八幡宮を描いた『越中宝鑑』には「御館山」が描かれている。
- 鷹栖の小舟の土居や東保の館の土居と同様、西宮森村地引図や「館城之落城書」を基に推測すると方形単郭プランと考えられる。この館は、天正9年（1581）7月、3km北方の木舟城が織田勢に攻略された時に焼き払われたと伝えられる。御館山館は、木舟城主・石黒氏の支城的機能があった可能性がある。

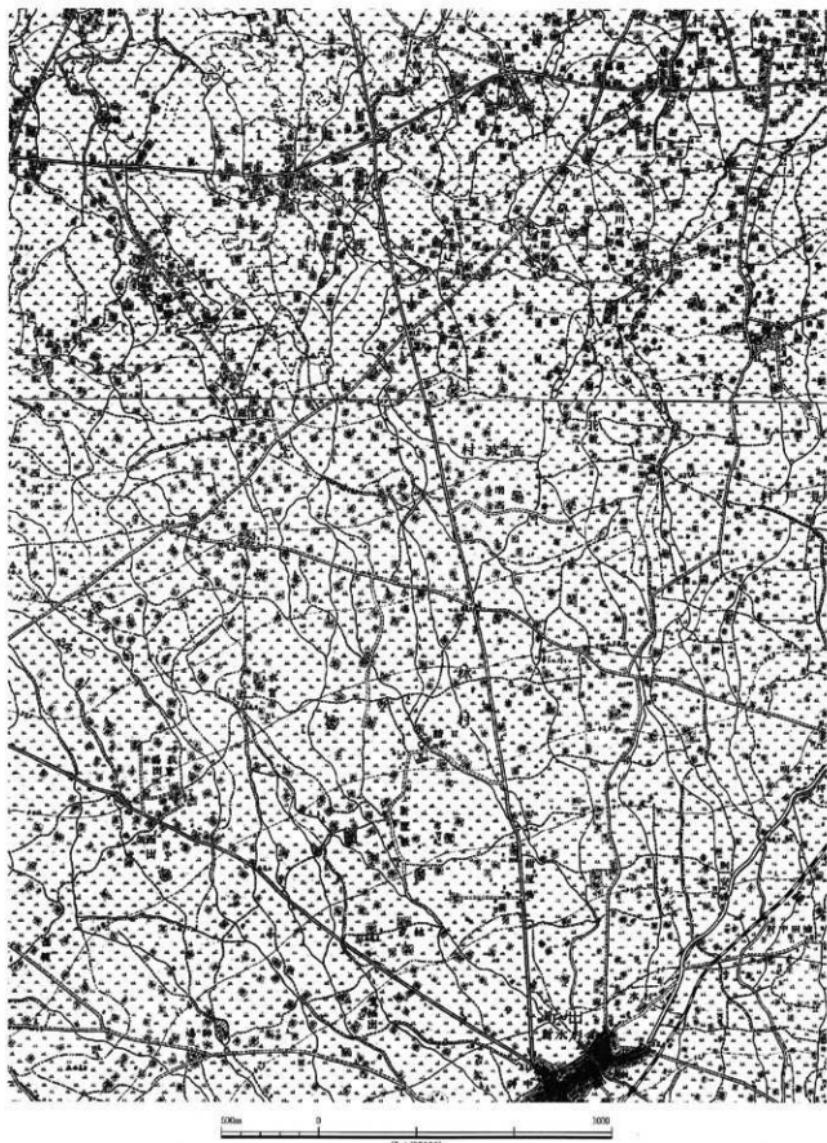


Fig.7 調査区周辺の旧版地図

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万分の1旧版地図を複製したものである。(承認番号) 平18北版、第151号

## 2 採集遺物

**遺物構成** 採集遺物の時期別点数は、古代 11 点、中世 54 点、近世 276 点、近代・時期不明 27 点、合計 368 点である。種類は、須恵器、中世土師器、珠洲、越前、青磁、越中瀬戸、唐津、肥前陶磁器等で構成される。遺物割合は、古代 3%、中世 14.7%、近世 75%、近代 7.3% となる。

**分布状況** 林地区の杉木地内は区画整理工事が進行中であり、遺物はほとんど採集できなかつた。田畠は遺物が比較的散漫としていたが、場所により濃密に分布する地点がいくつか認められた。遺物分布が希薄な地帯は、調査区内を流れる荒俣川、山王川、上黒石川の流路と位置・方向性が重なることから、河道により埋蔵文化財包蔵地が削平されたか、形成されなかつたと考えられる。

延喜式内社と伝わる林神社周辺では近世遺物が集中している中で、須恵器を探集している。調査区内でもっとも遺物採集が期待された小杉遺跡では周辺も含め、遺物密度は希薄であった。南高木遺跡周辺では、古代の須恵器杯類と珠洲をはじめ中世遺物が南北に長い範囲で散布している状況を確認した。周知の埋蔵文化財包蔵地として知られる東中遺跡と御館山館跡周辺は、中近世期の遺物が特に密集して採集された場所である。御館山館跡は木舟城との関連が考えられる城館であり、付近から中世遺物が採集されることを知っていた。今回の踏査により、該期の遺物分布を追認でき、また分布範囲を把握することができた。東中遺跡周辺も珠洲をはじめとする中世遺物が比較的狭い範囲に分布していた。江波地内ではこれまで遺跡は未確認だったが、真行寺周辺に中世遺物が濃密に分布することを把握することができた。

**遺物解説** 327 は須恵器の杯底部である。内外面とも回転撫でにより成形し、底部外面を笠切り後に撫で処理している。底径は 8.2cm を測る。329 は、須恵器杯の体部片である。外面に重ね焼き痕がある。359・348 は須恵器の裏体部片である。内面に同心円叩き、外面に平行叩き痕がある。75 は越前の壺である。口縁部は折り返しており、口径 8.6cm を測る。外面に釉がかかる。165・122・171 は中世土師器の皿である。165 は小型のコースター状の皿で、口径 7.1cm、器高 1.55cm を測る。122 は口縁端部に炭化物が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。口径 10cm を測る。171 も灯明皿で、16 世紀の年代を与える。口径 8.3cm を測る。308・277・352・362・369・169 は珠洲であり、169 を除き裏体部片である。169 は片口鉢の口縁部である。口径 20.3cm を測る。越中瀬戸は、岡化した遺物でもっとも数が多い。99・60・56・315 は皿口縁部である。24・176・211・173・52・319・247・363・147・149 は皿底部である。243 は、越中瀬戸の皿であるが、底部内面に印花文が施されている。169 は越中瀬戸の皿と考えられるが、内面に墨書きがある。文字は判読不能。201 は瀬戸・美濃の天目茶碗の体部片である。黒い鉄釉がかかる。199・18・73・20 は越中瀬戸の碗高台である。

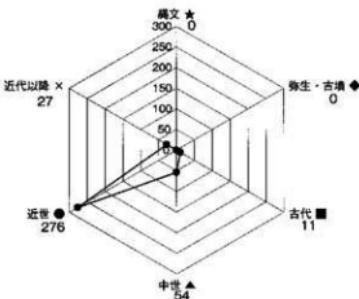


Fig.8 採集遺物の時期別点数

69は壺底部であり、底径 6.2cm を測る。底部外間に回転糸切り痕が残る。87は越中瀬戸碗の口縁部であり、鉄軸がかかる。154は越中瀬戸の碗でもっとも残りが良い。口径 12.7cm を測り、内外面とも鉄軸がかかる。越中瀬戸の匣の底部である。底径は 7.8cm を測り、比較的難な作りをしている。底部外間に回転糸切り痕が残る。353・151・7は青磁である。353は青磁碗の口縁部であり、口径 10.4cm を測る。中世に属する。151は近世の青磁である。口径 13.6cm を測る。7も近世の青磁で、口径 15.4cm を測る。器種は特定できない。

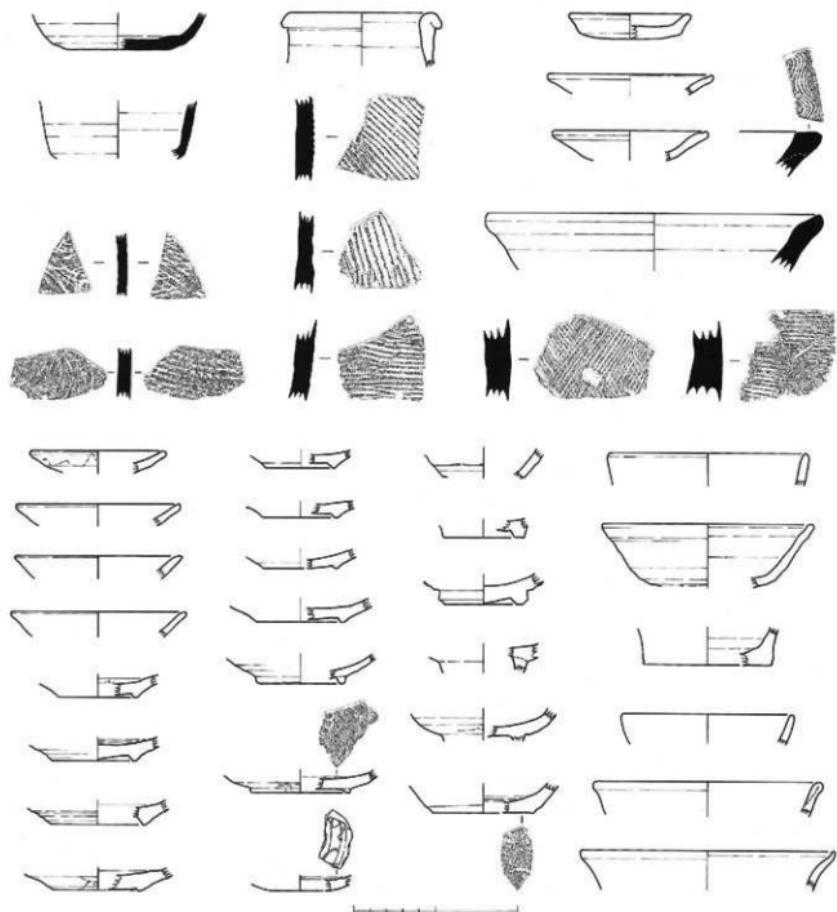


Fig.9 遺物実測図

Tab.3 採集遺物一覧(1)

遺物番号	遺物情報	通類	マーク	遺物番号	遺物情報	通類	マーク	遺物番号	遺物情報	通類	マーク
1	不明	不明	×	51	肥前、鍋	五輪	●	161	高麗	近世	●
2	不明	近世	●	52	越中漆戸・銅器	五輪	●	162	漆戸	近世	▲
3	不明	中世	●	53	漆戸	五輪	●	163	漆戸	近世	●
4	陶器	近世	●	54	陶器	五輪	●	164	越中漆戸・墨鉢・鉢盤、壺?	近世	●
5	陶器	近世	●	55	陶器	近世	●	165	中世上部漆戸	中世	●
6	上野多賀上器	不明	×	56	芝居	近世	●	166	越中漆戸、瓦	近世	●
7	青磁	近世	●	57	越中漆戸、瓦	近世	●	167	漆戸	近世	●
8	土師質質上器	近世	●	58	唐津、唐津	近世	●	168	珠洲・磁石	中世	●
9	越中漆戸、瓦	近世	●	59	唐津、熱	近世	●	169	鉢盤・指鉢	近世	●
10	窯器、壺	近世	●	60	唐津、熱	近世	●	170	越中漆戸(墨書)	近世	●
11	越中漆戸、瓦、入	近世	●	61	越中漆戸、瓦	近世	●	171	青磁	中世	●
12	石	不明	×	62	芝居	近世	●	172	中世上部漆戸	中世	●
13	唐津、壺	近世	●	63	越中漆戸、瓦	近世	●	173	越中漆戸、瓦	近世	●
14	不明	不明	×	64	高麗(朱付)	近世	●	174	肥前、鉢盤	近世	●
15	越中漆戸	近世	●	65	高麗	近世	●	175	越中漆戸、瓦	近世	●
16	鉢	近世	●	66	不明	近世	●	176	越中漆戸、瓦	近世	●
17	肥前、壺	近世	●	67	五	近世	●	177	越中漆戸、瓦	近世	●
18	越中漆戸、瓦	近世	●	68	陶器	近世	●	178	越中漆戸、瓦	近世	●
19	青磁	近世	●	69	高麗	近世	●	179	越中漆戸、瓦	近世	●
20	越中漆戸、瓦、陶器	近世	●	70	越中漆戸、瓦	近世	●	180	越中漆戸、瓦	近世	●
21	土師質質上器	近世	●	71	陶器	近世	●	181	越中漆戸、瓦	近世	●
22	陶器	近世	●	72	肥前、瓦	近世	●	182	陶器	近世	●
23	肥前、碗	近世	●	73	陶器	近世	●	183	陶器、碗	近世	●
24	越中漆戸、瓦	近世	●	74	陶器	近世	●	184	瓦質土器	近世	●
25	陶器	近世	●	75	越中漆戸	近世	●	185	陶器、袋	近世	●
26	陶器、瓦	近世	●	76	陶器	近世	●	186	陶器、袋	近世	●
27	越中漆戸、櫻木	近世	●	77	陶器	中世	▲	187	陶器、櫻木	近世	●
28	越中漆戸、櫻木	近世	●	78	陶器	中世	▲	188	陶器、櫻木	近世	●
29	土師質質櫻木	近世	●	79	高麗	近世	●	189	陶器、櫻木	近世	●
30	越中漆戸	近世	●	80	大師質質櫻木	近世	●	190	陶器、系入?	近世	●
31	越中漆戸、瓦	近世	●	81	肥前、瓦	近世	●	191	瓦質土器、櫻木	近世	●
32	唐津、櫻木	近世	●	82	越中漆戸、瓦	近世	●	192	土師質質櫻木	近世	●
33	越中漆戸、瓦	近世	●	83	肥前、碗	近世	●	193	越中漆戸、瓦	近世	●
34	陶器、瓦	近世	●	84	高麗、櫻木	近世	●	194	陶器、櫻木	近世	●
35	陶器	近世	●	85	陶器	近世	●	195	唐津、櫻木	近世	●
36	陶器	近世	●	86	高麗	近世	●	196	肥前、碗	近世	●
37	十郎質質十器	近世	●	87	唐津、瓦	近世	●	197	陶器	近世	●
38	肥前、紅皿	近世	●	88	陶器、瓦	近世	●	198	高麗、碗	近世	●
39	御器、紅皿	古代	■	89	陶器	近世	●	199	高麗、碗、鴨	近世	●
40	十郎質質十器	近世	●	90	高麗、瓦	近世	●	200	高麗、碗	近世	●
41	越中漆戸、瓦	近世	●	91	越中漆戸、瓦	近世	●	201	湘南失樂、大日	近世	●
42	越中漆戸、瓦	近世	●	92	中世土器	中世	▲	202	陶器、瓦	中世	●
43	肥前、瓦	近世	●	93	陶器	近世	●	203	陶器、碗	近世	●
44	陶器	近世	●	94	唐津、瓦	近世	●	204	高麗、片口鉢	近世	●
45	瓦器	近世	●	95	高麗	近世	●	205	不明	近世	●
46	唐津、櫻木	近世	●	96	越中漆戸、瓦	近世	●	206	陶器、瓦	近世	●
47	唐津、櫻木	近世	●	97	陶器	近世	●	207	越中漆戸、瓦	近世	●
48	越中漆戸、瓦	近世	●	98	越中漆戸、瓦	近世	●	208	越中漆戸、瓦	近世	●
49	肥前、瓦	近世	●	99	陶器、瓦	近世	●	209	越中漆戸	近世	●
50	陶器、急須	近世	●	100	高麗	近世	●	210	越中漆戸、瓦	近世	●
51	陶器、櫻木	近世	●	101	高麗	近世	●	211	越中漆戸、瓦	近世	●
52	越中漆戸、瓦	近世	●	102	高麗	近世	●	212	陶器、櫻木	近世	●
53	三重、瓦	近世	●	103	越中漆戸、瓦	近世	●	213	高麗	近世	●
54	陶器、櫻木	近世	●	104	高麗	近世	●	214	肥前、紅皿	近世	●
55	陶器	近世	●	105	高麗	近世	●	215	瓦質土器	近世	●
56	越中焼戸、瓦	近世	●	106	高麗	近世	●	216	高麗、瓦	近世	●
57	越中焼戸、瓦	近世	●	107	高麗	近世	●	217	陶器、櫻木	近世	●
58	越中焼戸、瓦	近世	●	108	高麗	近世	●	218	陶器、櫻木	近世	●
59	陶器、碗	近世	●	109	高麗	近世	●	219	肥前、碗	近世	●
60	越中焼戸、瓦	近世	●	110	高麗	近世	●	220	唐津、櫻木	近世	●
61	陶器、碗	近世	●	111	高麗	近世	●	221	越中漆戸、瓦	近世	●
62	高麗	近世	●	112	高麗	近世	●	222	越中漆戸、瓦	近世	●
63	高麗	近世	●	113	高麗	近世	●	223	越中漆戸、瓦	近世	●
64	越中焼戸、瓦	近世	●	114	高麗	近世	●	224	高麗	近世	●
65	高麗	近世	●	115	高麗	近世	●	225	高麗	近世	●
66	朱漆	近世	●	116	高麗	近世	●	226	高麗	近世	●
67	朱漆	近世	●	117	高麗	近世	●	227	高麗	近世	●
68	陶器	近世	●	118	高麗	近世	●	228	高麗	近世	●
69	十人形	近世	●	119	高麗	近世	●	229	十郎質質十器	近世	●
70	越中焼戸、瓦	近世	●	120	高麗	近世	●	230	瓦質土器、櫻木	近世	●
71	高麗	近世	●	121	高麗	近世	●	231	中里上、鉢	近世	●
72	陶器	近世	●	122	高麗	近世	●	232	陶器	近世	●
73	越中焼戸	近世	●	123	高麗	近世	●	233	陶器	近世	●
74	陶器	近世	●	124	高麗	近世	●	234	陶器、櫻木	近世	●
75	高麗、壺	近世	●	125	高麗	近世	●	235	珠洲	近世	●
76	高麗	近世	●	126	高麗	近世	●	236	高麗	近世	●
77	高麗、打皿	近世	●	127	高麗	近世	●	237	中里上、鉢	近世	●
78	土師質質十器	近世	●	128	高麗	近世	●	238	中里上、陶器	近世	●
79	唐津、櫻木	近世	●	129	高麗	近世	●	239	唐津、櫻木	近世	●
80	唐津、櫻木	近世	●	130	高麗	近世	●	240	唐津、櫻木	近世	●

Tab.4 採集遺物一覧 (2)

遺物番号	遺物種類	時期	マーク	登録番号	遺物種類	時期	マーク
241	陶器、漆林	近世	●	321	越中漆戸、瓦	近世	●
242	越中漆戸、且	近世	●	322	瓦	中世	▲
243	漆器	中世	▲	323	陶器	近世	▲
244	陶器、小鏡	近世	●	324	床脚、漆林	近世	▲
245	陶器、鏡	近世	●	325	中臣上師器	近世	▲
246	陶器	近世	●	326	陶器、越中漆戸	近世	●
247	青磁・越中漆戸・舟漆・漆器	中世	▲	327	須恵器、無台杯	近世	●
248	石	不明	×	328	陶器	近世	●
249	珠洲・越中漆戸	中世	▲	329	須恵器、环身	近世	●
250	越中漆戸	近世	●	330	須恵器、环身	近世	●
251	中世・漆器	中世	▲	331	須恵器、环身	近世	●
252	漆器、鏡	近世	●	332	漆器	近世	●
253	陶器、瓦	近世	●	333	陶器	近世	●
254	越中漆戸	近世	●	334	陶器	近世	●
255	陶器、鏡	近世	●	335	陶器、鏡	近世	●
256	陶器、瓦	近世	●	336	陶器、鏡	近世	●
257	肥前、鏡	近世	●	337	陶器、鏡	近世	●
258	陶器、且	近世	●	338	陶器、鏡	近世	●
259	中世・漆器	中世	▲	339	漆器、鏡	近世	●
260	陶器、且	近世	●	340	陶器	近世	●
261	瓦質土器、漆林	近世	×	341	陶器	近世	●
262	-	-	-	342	陶器	近世	●
263	-	-	-	343	陶器	近世	●
264	陶器、瓦	近世	●	344	陶器	近世	●
265	陶器	近世	●	345	陶器	近世	●
266	珠洲	中世	▲	346	陶器	近世	●
267	陶器	近世	●	347	陶器、漆林	近世	●
268	-	-	-	348	須恵器	近世	●
269	陶器、且	近世	●	349	陶器、瓦	近世	●
270	肥前、鏡	近世	●	350	須恵器	近世	●
271	肥前、鏡	近世	●	351	珠洲	中世	●
272	陶器、漆林	近世	●	352	珠洲	中世	●
273	越中漆戸、漆林	近世	●	353	青磁、鏡	近世	●
274	陶器	近世	●	354	瓦	中世	●
275	陶器	近世	●	355	大正	近世	●
276	岩井、漆林	中世	▲	356	須恵器	近世	●
277	珠洲	中世	●	357	須恵器	近世	●
278	珠洲	中世	●	358	須恵器	近世	●
279	越中漆戸、漆林	近世	●	359	須恵器	近世	●
280	-	-	-	360	陶器、瓦	近世	●
281	床脚、中世土蔵窓	中世	▲	361	陶器、瓦	近世	●
282	陶器、林	近世	●	362	珠洲	近世	●
283	陶器	近世	●	363	越中漆戸、瓦	近世	●
284	肥前、且	近世	●	364	陶器、瓦	近世	●
285	陶器	近世	●	365	肥前、鏡	近世	●
286	南器	近世	●	366	陶器、瓦、鏡	近世	●
287	陶器	近世	●	367	肥前・青磁	近世	●
288	陶器、鏡	近世	●	368	珠洲	近世	●
289	中世土蔵窓・陶器	中世	▲	369	珠洲	中世	●
290	陶器	肥前、鏡	近世	370	土師質土器	不明	●
291	陶器	近世	●				
292	南器	近世	●				
293	陶器、漆林	近世	●				
294	陶器、漆林	近世	●				
295	陶器、漆林	近世	●				
296	店肆、漆林	近世	●				
297	陶器、鏡	近世	●				
298	陶器	近世	●				
299	陶器、鏡	近世	●				
300	陶器、鏡	近世	●				
301	床家、鏡	近世	●				
302	南器、且	近世	●				
303	陶器	近世	●				
304	陶器	近世	●				
305	陶器	近世	●				
306	越中漆戸、且	中世	●				
307	火鉢	近世	●				
308	珠洲	中世	●				
309	陶器	近世	●				
310	陶器	近世	●				
311	陶器	近世	●				
312	陶器、青	近世	●				
313	陶器、鏡	近世	●				
314	分量	近世	●				
315	越中漆戸、且	近世	●				
316	肥前、鏡	近世	●				
317	肥前、鏡	近世	●				
318	陶器、鏡	近世	●				
319	越中漆戸、且	近世	●				
320	越中漆戸、且	近世	●				

### 3 遺跡各説

遺跡名	林神社遺跡 〔新規〕	遺跡番号	—	地図	NJ531211
所在地	砺波市林	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	古代・近世		
遺物番号	34.35.36.38.39.40.41				
包蔵地	近世期遺物が密集しているが、古代に帰属する須恵器（39）を1点採集している。林神社は				
認定	延喜式内社に比定される。旧中村川右岸に広がるマッドに位置しており、旧地形が周辺より地形的に高い微高地と考えられるため、遺跡が形成されている可能性が高いことから包蔵地として認定した。				
調査歴	なし				
文献	なし				
遺跡名	南高木遺跡 〔範囲変更〕	遺跡番号	—	地図	NJ531211
所在地	砺波市南高木・小杉	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	古代・中世・近世		
遺物番号	322～337,339,340,347～356,358,359				
包蔵地	旧河道左岸に古代、中世期遺物が南北に長い範囲で採集された。調査区内でもっとも古代遺				
認定	物が分布していた。8世紀後半から9世紀後半の土師器・須恵器が出土した小杉遺跡が南に近接することから、一連の遺跡である可能性も考えられる。これまでにも宅地の地下約90cmから須恵器が出上している。その須恵器は他の破片が溶着しており、窯壁らしき遺物も発見されている。平地は窯の立地として考え難い面もあるが、流れ込みとも即断できない。今回採集した須恵器は杯類や壺があるが、年代を特定するのは難しい。他に珠洲、越前を採集した。旧地形はマッド上にないが、遺物が濃密に分布する範囲を包蔵地として範囲変更した。				
調査歴	なし				
文献	なし				
遺跡名	東中遺跡 〔範囲変更〕	遺跡番号	208076	地図	NJ531211
所在地	砺波市東中	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	中世・近世		
遺物番号	118,267,275～277,279,281～284,286～291,297				
包蔵地	これまでに珠洲（吉岡編年IV期）や中世土師器等、15世紀代の遺物が発見されており、今回				
認定	の踏査でも同種の遺物を採集している。岸渡川を東端とし、東中神社から県道福光・福岡線までの範囲で遺物が多く採集された。旧中村川右岸のマッドに位置しており、遺跡が形成されている可能性が高いことから包蔵地に認定した。				
調査歴	なし				
文献	なし				

遺跡名	御館山館跡 〔範囲変更〕	遺跡番号	208075	地図	NJ531211
所在地	砺波市東中	現況	水田・宅地		
種別	城館	時代	中世・近世		
遺物番号	106,107,218 ~ 225,227,228,230,232 ~ 236,238,239,243,244,246,247,252 ~ 254,257,258,260,264				
包蔵地	「御館山」の呼称で伝わる館跡で、岡場整備前の図面でも方形単郭のプランが確認できる。これまでの包蔵地範囲は、その図面を基に作成されたものである。今回の踏査により、珠洲、中世土師器等の中世期遺物が広範囲に分布していることが確認できた。本遺跡は東中遺跡をも包括する南北に長い広大なマップ上にある。そのマップの中央部分に存在しており、城館を造成するにあたり、もっとも安定した土地を選地した可能性が高い。これまでの包蔵地範囲は岡場整備前の図面を基に設定されていたが、周辺部にも遺物が濃密に分布することから、範囲を拡大することとした。				
認定					
調査歴	なし				
文献	なし				
遺跡名	江波遺跡 〔新規〕	遺跡番号	-	地図	NJ531211
所在地	砺波市江波	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	中世・近世		
遺物番号	154 ~ 163,165,167,169 ~ 171,175 ~ 179				
包蔵地	江波の真行寺を中心に中世期遺物が集中して採集された。珠洲、中世土師器が主に採集され				
認定	ている。また、真行寺南の墓地には五輪塔の残骸も残っている。この地点は、御館山館・東中遺跡を包括するマップと隣接して存在するマップの南端に位置している。マップは北方向（高岡市方向）に延びている。付近はこれまで遺跡の空白地帯であったが、近くには延喜式内社である長岡社の石碑や幹道である主要地方道富山・戸出・小矢部線が走っていることから交通の要衝と考えられ、南約1kmにある御館山館と関連する遺跡が存在する可能性がある。マップ地形上で遺物が集中する範囲を包蔵地として新たに認定した。				
調査歴	なし				
文献	なし				

### 第3章 まとめ

**調査所見** 今年度調査区は延喜式内社である林神社の比定地があることや、付近に長岡神社の石碑も残っていること、そして奈良・平安期の小杉遺跡があることから、古代集落の発見を期待して調査に臨んだ。予想通り、小杉遺跡の南側で古代遺物が集中する範囲があり、今回南高木遺跡として認定した。小杉遺跡とは若干距離があるものの、同一マップ上にのことから連続した遺跡である可能性も考えられる。

また、今回の調査区内では五輪塔が所々に安置されている状況を把握した。過去2年間の踏査でも墓地や民家周辺は五輪塔がある場合が多いので注意していたが、今年度よりは少なかった。やはり中世に作られた御館山館を中心として、中世期に何らかの動きがあったとの証左と考えられる。

改めて認識したのは、遺物が集中する範囲はマップの位置と重なるという傾向である。河川の氾濫が多い扇状地上では人々も居住地を安定した土地に求めたことによるものと考えられる。しかし、調査区内は人規模な圃場整備がすでに実施されており、遺物の希薄地帯=遺跡が形成されなかつた地帯と短絡することはできない。東中にある義仲伝説の午飯岡付近には石碑が残るもの、遺物は少なかつた。

- 林** 林神社遺跡、南高木遺跡の2遺跡を新規に認定した。すでに登録されている小杉遺跡については、付近に遺物が採集されなかつたことから範囲変更は行わなかつた。南高木遺跡では今回の調査区で唯一古代遺物が集中しており、小杉遺跡との連続性も考慮される。東大寺領庄園の開田に伴い平野部に遺跡が形成される動きとの関連が示唆される。また、糸屋鳥神社は小規模なマップ地形上にあり、境内に五輪塔を確認したが包蔵地に足る要素が少なかつたことから、今回は認定を見送ることにした。
- 高波** 江波遺跡を新規に認定、すでに登録されている東中遺跡、御館山館跡の2遺跡を範囲変更した。高波地区は、中世的な色相が強いことを認識できた。江波遺跡、そして東中遺跡と御館山館跡がある2地点は、いずれも幹道沿いにあり、交通の要衝にあることから中世期から遺跡が形成される要素をもつ。御館山館跡は岸渡川沿いに立地しており、川から生活用水を得ていたと考えられる。また、東中、江波付近では湧水点があり、砺波市との境界に近い高岡市域では弥生期の遺跡があるが今回の調査では該期の遺物は採集できなかつた。

Tab.5 調査遺跡一覧

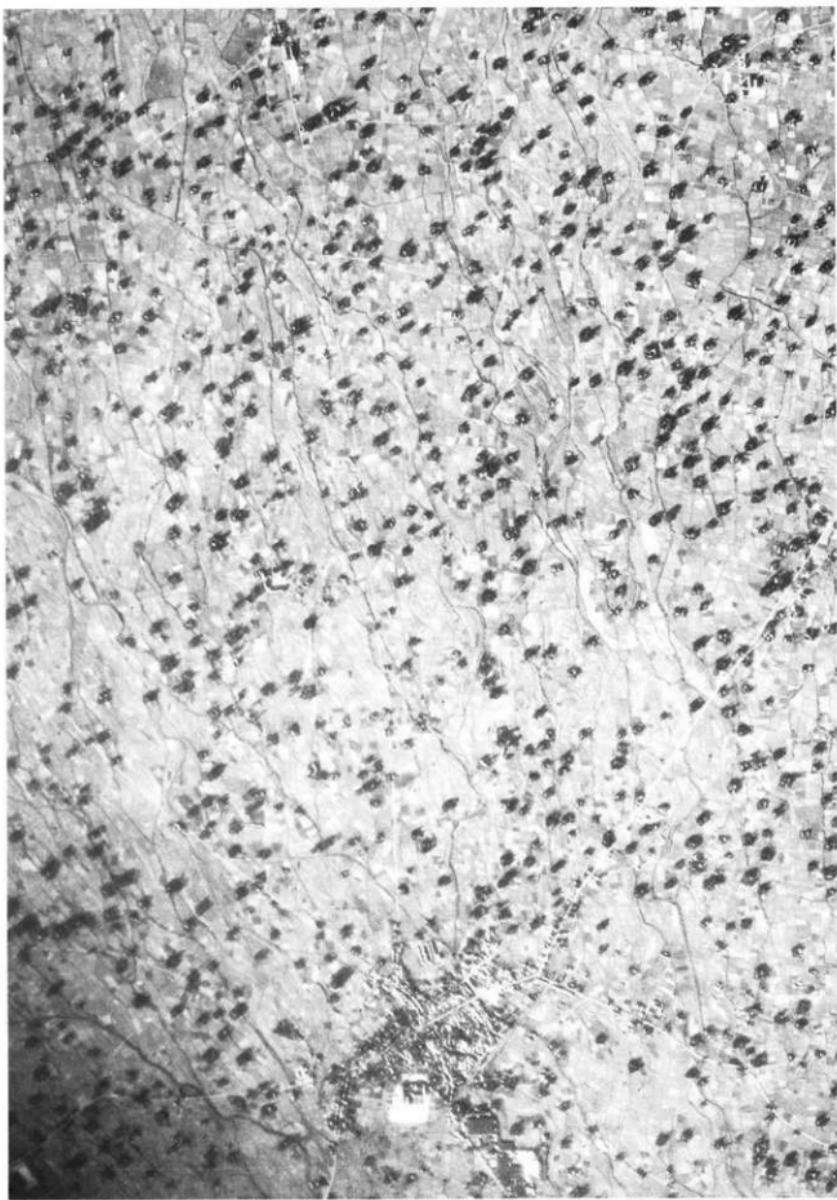
遺跡番号	通路名	所在地	時代	摘要
1	—	林神社遺跡	砺波市林	古代・近世 新規
3	—	南高木遺跡	砺波市南高木・小杉	古代・中世・近世 新規
4	208076	東中遺跡	砺波市東中	中世・近世 範囲変更
5	208075	御館山館跡	砺波市東中	中世・近世 範囲変更
6	—	江波遺跡	砺波市江波	中世・近世 新規

※新規3遺跡、範囲変更2遺跡

## 参考文献

- 有間正一郎他編 2001 「歴史地理調査ハンドブック」 古今書院
- 犬伏和之・安西徹郎編 2001 『土壤学概論』 朝倉書店
- 大垣市教育委員会文化部 1997 『大垣市遺跡群細分布調査報告書 解説編』
- 神島利夫 1982 「地形地質」『地下水利用等基礎調査報告書』 富山県
- 鈴木隆介 1998 『建設技術者のための地形図読図入門 第2巻 低地』 古今書院
- 高橋 学 2003 『平野の環境考古学』 古今書院
- 竹村利夫 1978 「砺波平野南部地域の段丘地形」『地理学評論』 vol.51-9
- 地学団体研究会編 1994 『新版地学教育講座 9 地表環境の地学—地形と土壤—』 東海大学出版会
- 砺波市・砺波市土地改良協会 1985 『砺波市ほ場整備完成記念誌』
- 砺波市史編纂委員会 1990 『砺波市史資料編1 考古 古代・中世』
- 1996 『砺波市史資料編5 集落』
- 富山县農地林務部ほ場整備課 1981 『土地分類基本調査 城端』
- 1970 『土地分類基本調査 石動』
- 外山秀一 1997 「プラント・オバールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」  
『砺波散村地域研究所研究紀要第13号』 砧波市立砺波散村地域研究所
- 久間一剛他編 1993 『土壤の事典』 朝倉書店
- 深井三郎 1976 『富山の地形と地質』 富山県自然保護課

PL.1 空中写真(1)



この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。(承認番号) 平18北複、第151号

PL.2 空中写真（2）



この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号）平18北復、第151号

PL.3 調査写真

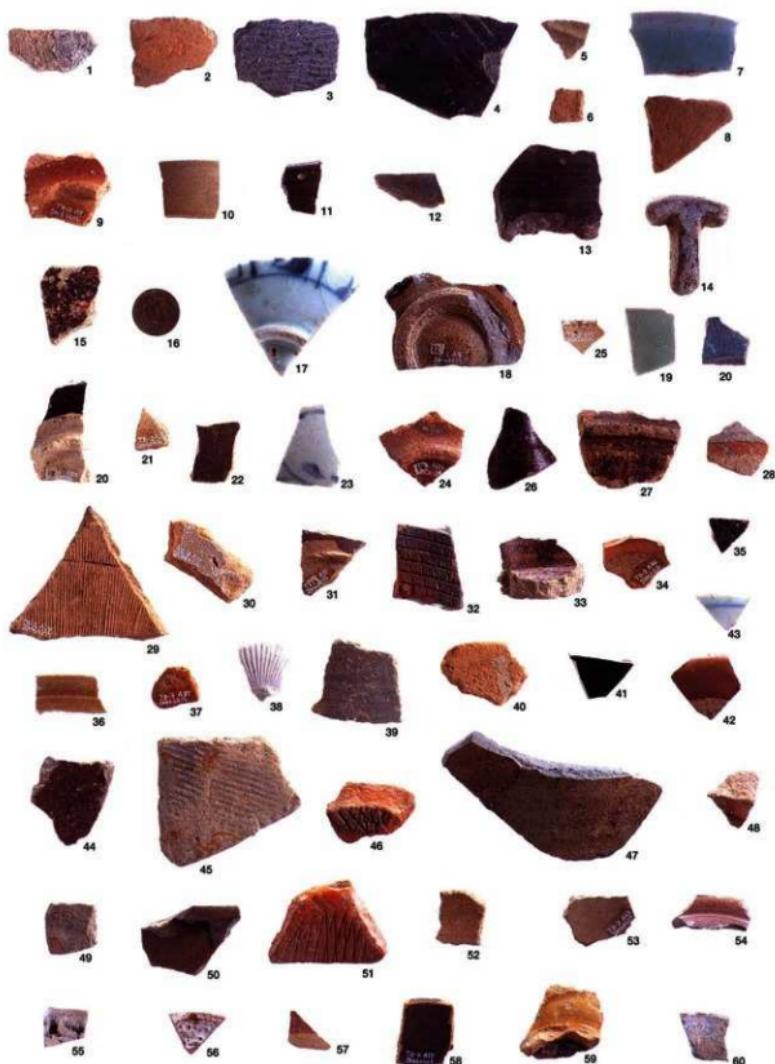


1. 林神社道路 2. 小杉道路 3. 南高木道路 4. 東中郷跡 5. 御館山館跡 6. 御館山館跡の石碑 7. 江波遺跡 8. 調査風景

PL4 調査写真 (2)



1. 佐原島神社の五輪塔  
2. 小杉神社境内の五輪塔  
3. 東中道跡内の五輪塔  
4. 五輪塔近景  
5. 五輪塔近景  
6. 御館山館の五輪塔  
7. 真行寺(江波)墓地内の五輪塔  
8. 新村墓地(坪北)内の五輪塔



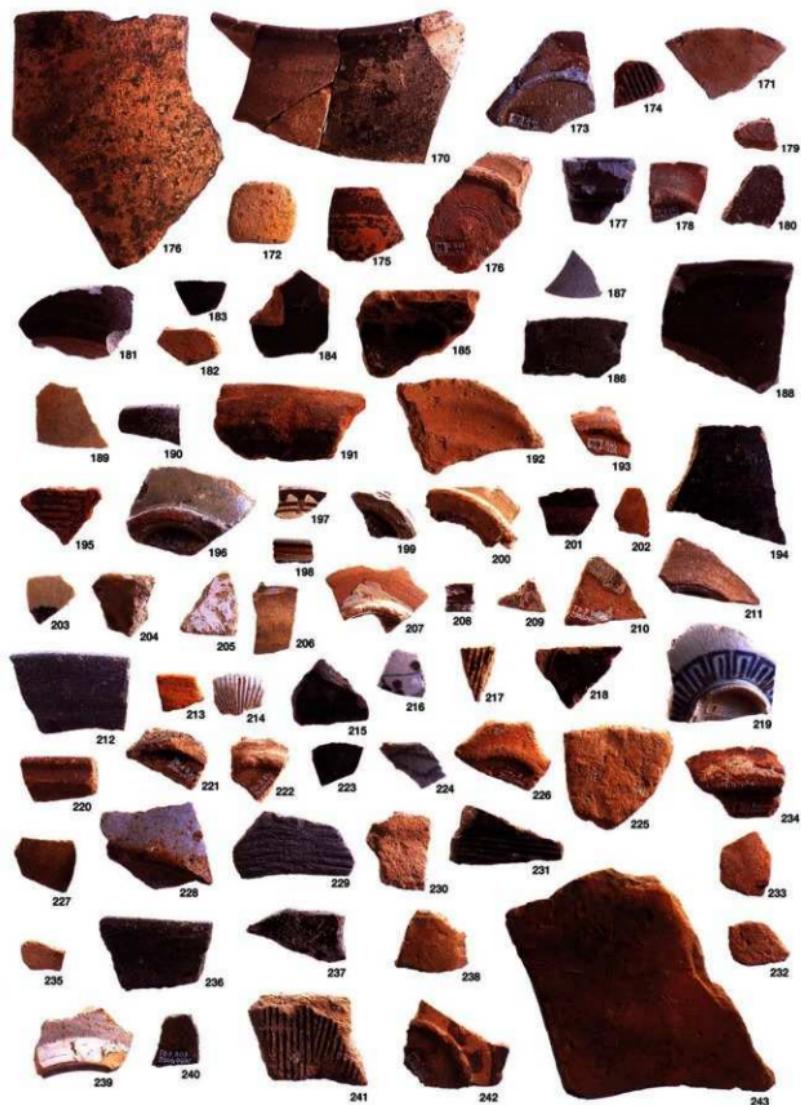
PL.6 遺物写真 (2)



PL.7 遺物写真(3)



PL.8 遺物写真（4）



PL.9 遺物写真 (5)



PL.10 遺物写真 (6)



# 報告書抄録

ふりがな	となみしいせきしうさいぶんぶちょうさほうこくさん					
書名	砺波市遺跡詳細分布調査報告3					
副題	林・高波					
編著者名	野原大輔(砺波市教育委員会生涯学習課)					
編集・発行機関	砺波市教育委員会					
所在地	〒932-0393 富山県砺波市庄川町吉島401番地 TEL0763-82-1904					
発行年月日	平成19年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所存地	コ一ド		北緯	東経	調査原因
し な い い せ き	ヒヤメンドナミヒツメ、こうやじ え、すげのき、こすぎ、おじま、ひが しなか、みずのかや、あらやしき、ふ じざわ(たのしり)、さきたかざ、ひ がしみやもり、にしみやもり、よなみ、 あらや、あらやしん、つばさた、つぼ せたしん、たかで、みみみたかざ	市町村 162086	遺跡番号 —	36度39分5秒	137度2分52秒	市内遺跡詳細 分布調査事業
市内遺跡	砺波市口浜・御里島・杉木・小杉・ 小島・東中・永富・新庭敷・御前(御田)・ 北木・東宮森・西宮森・江波・荒壁・ 荒屋敷・坪北・坪北新・高倉出・南高 木			調査面積	調査期間	
遺跡名	種別			主な時代	主な遺構	
市内遺跡	—	—	—	—	—	
林神社遺跡	散布地	古代・近世	—	須恵器、近世陶磁器	—	
南高木遺跡	散布地	古代・中世・近世	—	土師器、須恵器、珠洲、越前	—	
東中遺跡	散布地	中世・近世	—	珠洲、近世陶磁器	—	
御館山館跡	城館	中世・近世	—	土師器、珠洲、近世陶磁器	—	
江波遺跡	散布地	中世・近世	—	土師器、珠洲、近世陶磁器	—	

# DISTRIBUTION SURVEY REPORT OF THE TONAMI CITY Vol.3

— HAYASHI • TAKANAMI —

Copyright © Tonami Prefectural Board of Education

401 Aoshima Shogawamati Tonami-City Toyama 932-0392,Japan

No parts of this publication may be reproduced or copied by any means  
without prior permission of the copyright owner.



## 砺波市遺跡詳細分布調査報告 3

—林・高波—

2007年3月30日発行

編集 砧波市教育委員会

〒 932-0393 富山県砺波市庄川町青島 401 番地  
TEL (0763) 82-1904 FAX (0763) 82-3521

発行 砧波市教育委員会

印刷 株式会社チューイツ

〒 939-1308 富山県砺波市三郎丸 45 番地  
TEL (0763) 32-2021 FAX (0763) 32-2720

Printed in Japan

